

3年課程の看護学生のストレス対処能力(SOC)を高める 段階的学習支援方法の検討

～縦断的横断的調査を踏まえたチューター制学生支援計画の考案～

Examination of gradual learning support program to raise the SOC in junior nursing college students.

The planning from tutorial learning support system based on longitudinal
and cross-sectional survey

高橋 由美 ・ 二口 尚美 ・ 佐藤 理恵 ・ 伊藤 茉莉子
TAKAHASHI Yumi, FUTAKUCHI Hisami, SATO Rie, ITO Mariko

菅原 尚美 ・ 岡崎 優子 ・ 阿部 春美
SUGAWARA Naomi, OKAZAKI Yuko, ABE Harumi

キーワード：看護学生，ストレス対処能力（SOC），段階的学習支援方法，チューター制学生支援

Key Words：Nursing students, Sense of Coherence（SOC）, Gradual learning support program,
Tutorial System for Students

要 旨

本研究は2部構成である。2017年度に行った一次研究では、A短期大学の看護学科1年生と2年生の臨地実習前後のSOCと関連要因を把握し、SOCを高める学習支援方法を検討した。二次研究では、一次研究で検討した学習支援の改善策を講じながら縦断的横断的に調査を行い、SOCの変化や関連要因をさらに把握した上で、SOCを高める学習支援方法の体系化を図ることを目的とした。2018年度に在籍した看護学生を対象とし、各学年の臨地実習前後に自記式質問紙調査を実施し、SOCの変化と関連要因について分析した。また、一次研究結果との比較により、改善策の効果について検討した。その結果、各学年のSOCは臨地実習後に概ね有意に向上したが、1年生では「看護過程の展開」2年生では「自分への好感度」3年生では「コミュニケーションへの不安」への支援に課題が残った。これらの結果を踏まえ、3年課程の看護学生のストレス対処能力（SOC）を高める段階的学習支援方法の体系化に向けた、現行のチューター制による3年間の学生支援計画を考案した。

Abstract

This study consists of two parts. In 2017, initial study demonstrated the SOC and related factors before and after the clinical training of the freshman & sophomore nursing students of a Junior College, and examined the learning support method to raise the SOC. In the follow up research, a longitudinal and cross-sectional survey had been conducted to follow up their SOC score and related factors while taking measures to improve the learning support method examined in the primary research, targeted that learning support methods would be systematized to raise their SOC score.

in 2018 a self-administered questionnaire survey was conducted to analyze changes in SOC and related factors before and after the clinical training in each grade of nursing students.

In addition, the effect of the improvement measures was examined by comparing with the results of the primary research. As a result, the SOC of each grade improved significantly after the clinical training, but in the 1st grade, challenges remained in "development of the nursing process", in the 2nd Grade, "favorability to oneself", and in the 3rd Grade, "anxiety about communication".

Based on these results, three year's gradual learning support program were planned with current faculty tutorial, which will be systematized to raise the SOC in junior nursing college students.

I. 序論

看護短期大学における3年課程のカリキュラムでは最終学年の3年次に、多くの臨地実習科目が配置されている。加えて進学・就職活動や国家試験受験対策等の課題に取り組むことになり、最終学年の看護学生は、様々なストレスに耐えながら、看護専門職になる上での学習課題と向き合っている。

ストレス対処能力 (Sense of Coherence、以下SOCとする) は困難を乗り越える力として、アントノフスキーによって提唱され [1]、わが国でも様々な分野で研究が行われるようになってきた [2-6]。

研究者らは、これまでの先行研究からの知見を基に [7-11]、一次研究としてA短期大学看護学科の2017年度1年生と2年生の臨地実習前後のSOCと関連要因を把握し、SOCを高める学習支援方法を検討することを目的とした横断的調査を行った。その結果、1年生と2年生のSOC得点は臨地実習後に向上する傾向があった。1年生の入学後早期の基礎看護学実習Iでは、対人関係や職業志望動機がSOC得点に影響を及ぼしてい

た。2年生では、実習中の人間関係や相談できる人の存在がSOC得点に影響を及ぼしていた。1年生および2年生のSOCの低い学生に、「相談できる人」がなく、「ストレスコーピング」していない、さらに「コミュニケーションに対する不安」があり、「自分に対する好感度」が低いという特徴があることが明らかになった。看護学生のSOCを高めるためには、これらの特徴を踏まえ、入学当初からの段階的な学習支援方法を検討する必要性が示唆された [12]。先行研究では看護学生のSOCの発達形成につながるサポート体制や教育環境の充実を図る重要性が報告されている。しかし、SOCの低い学生の特徴を踏まえ、さらに入学当初から段階的に学習を支援する方法はまだ確立されていない。

そこで二次研究では、2018年度に在学する看護学生の臨地実習前後のSOCと関連要因の変化を学習支援方法の改善策を講じながら縦断的横断的に把握し、一次研究における仮説を検証しながらSOCを高めるための段階的学習支援方法の体系化を図ることを目的とする。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、3年課程の看護学生の臨地実習前後のSOCと関連要因の変化を学習支援方法の改善策を講じながら縦断的横断的に把握し、SOCを高めるための段階的学習支援方法の体系化を図ることとする。

Ⅲ. 研究意義

3年課程の看護学生のSOCを高める段階的学習支援方法の体系化を図ることにより、学生が様々なストレスに耐えて自己実現を目指し、心身の健康状態を保持しながら、看護専門職になる上での課題と向き合えるための学習支援方法の確立につながる。看護学生のSOC育成は、新人看護師が困難を乗り越え、キャリア形成していくための基盤になり得ることから、今後の基礎看護学教育の発展に寄与する可能性がある。

Ⅳ. 研究方法

1. 2018年度に在籍した看護学生を対象とし、1年生は基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの前後、成人看護学実習Ⅰの前後、3年生は領域・統合実習の前後に自記式質問紙による横断的調査を実施し、SOCの変化群と関連要因について分析した。
2. 2年生(17年入学生)、3年生(16年入学生)は2017年度に実施した一次研究データを用いた2年間の縦断的調査により変化を確認した。
3. 学習支援方法は既存の指導体制や方法に、1年生、2年生を対象とした改善策を加え、一次研究データとの比較により、効果の有無を確認した。

1) 既存の学習支援方法の概要

(1) チューター制学生支援

開学当初よりチューター制学生支援を行っている。短期大学での履修科目や生活に適応する上で、学業上の相談や助言を行い、学生の主体的な学修成果が得られるように支援している。各学年担当

教員は90名程度の学生を5～8名で分担し、年間計画のもとにクラスミーティングや面談等により、学習課題や生活・健康課題、看護師国家試験や進学・就職に関する支援を行っている。

2) 一次研究を基に検討した改善策

(1) 教員研修会の実施

2018年6月に看護学科教員を対象にしたFD研修で一次研究結果の報告を行い、SOCが低い学生の特徴や支援の方向性について共有した。入学当初に面談等で「志望動機」「相談できる人」「コミュニケーションへの不安」を把握しフォローする必要性についてである。続いて推奨図書[11]を教材とした抄読会を行い、学生が臨地実習で「良質な経験」ができるような指導方法について確認し合った。推奨図書は各教員が所持し、学生支援に活用できるようにした。

(2) 学生へのフィードバックと啓蒙活動

2018年4月より各学年のオリエンテーションや臨地実習オリエンテーション時に研究担当者より一次研究の結果を説明する機会を設け、臨地実習オリエンテーションでは、グループ作りやカンファレンスでの意見交換、教員や指導者への報告・連絡・相談の重要性について説明した。

2年生には、研究担当者が教授する「在宅看護概論」「災害看護」の授業内で、主要な観念としてSOCを紹介した。また、7月のクラスミーティングでは、著者の承諾を得て「自分を助けてくれる存在に気付くワークシート」[図1]を紹介し、成人看護学実習Ⅰ前の課題とした。

3. 用語の定義

本研究における用語を以下のように定義する。

1) ストレス対処能力

山崎ら[2]のストレス対処能力(SOC)の定義を用い、把握可能感、処理可能感、有意味感から成るその人の生活全般への志向性とした。

把握可能感は、状況を把握し先を見通す感覚。処理可能感は、何とかなると思える感覚。有意

自分を助けてくれる存在に気付くワークシート	
① (テーマ例 実習や課題を乗り越えるとき)	
あなたを助けてくれる存在	誰かいませんか？
実質的に助けてくれる人や組織、制度	②
情報をくれる人や機会	③
こころを癒してくれる人やペット	④
こころの居場所をくれる仲間や場所	⑤
決断や行動を後押ししてくれる人	⑥

(出典) 蝦名,「生き抜く力の育て方」P200 (大修館書店、2016)

図1 自分を助けてくれる存在に気付くワークシート

味感 自分の存在価値が分かり、ストレスに対処することに意味を見出す感覚である。

2) 段階的学習支援方法

学習進度にあわせた、徐々に難易度を上げていく段階的な学習の支援方法。

3) チューター制学生支援

チューターとは、学生のために勉学から生活上のサポートをする教員をいう。

チューター制学生支援とは、短期大学での講義などの科目履修や生活に適應する上で、学業上の相談や助言を行い、学生の主体的な学習成果が得られるように支援するもの。

4. 研究対象

A 短期大学看護学科 2018 年度に在籍した 1 年生 89 名、2 年生 84 名、3 年生 91 名を対象とした。

5. 研究期間

2018 年 4 月～2021 年 3 月

6. 調査方法

各学年の臨地実習の前後に、自記式質問紙を使用し把握した。

7. 調査項目

- 1) 基本属性は年齢を把握した。
- 2) SOC 得点は山崎らが開発した日本語版 SOC13

項目 7 件法 (range13-91 点) を用いて把握した。

- 3) 看護学生の生活に影響する項目として、先行研究を参考に「看護の志望動機」、「趣味」、「理想の看護師像」、「課外活動」、「相談できる人」、「日々のストレス」についての有無を把握した。さらに「ストレスコーピング」、「経済的満足度」、「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「看護教育による自己成長度」、「看護教育に対するストレス度」、「進路に対する不安」、「国家試験に対する不安」、「実習による成長への期待」、「実習に対する不安」、「コミュニケーションに対する不安」、「友人関係」、「家族関係」について、「まったくない」～「とてもある」、「とても悪い」～「とても良い」等の 5 段階評価で把握した。また、「相談できる人」は誰か、「日々のストレス」は何か、「ストレスコーピング」の方法、「実習に対する不安」は何かを把握した。

8. 分析方法

- 1) 統計解析には、IBM SPSS Statistics 24.0 を使用した。
- 2) SOC 尺度得点の実習前後の変化や各変数との関連性を対応のある t 検定により確認した。
- 3) 臨地実習前後の SOC 得点の変化の分析は、SOC 得点の中央値を基準に「高群」「低群」とし、変化のパターンと各変数との関連をクロス集計

および χ^2 検定により確認した。2年間のSOC変化群の分析は、一次研究データを用いて4時点間の高低の移動の内、低SOC維持群（低－低－低－低）の特徴を確認した。

4) 学習支援方法の改善策については、一次研究データとの比較により効果の有無を確認した。

9. 倫理的配慮

A短期大学研究倫理審査委員会の承認(2916)を得て実施した。対象者には文章と口頭で研究目的、方法、協力の任意性と拒否や撤回の自由、断っても成績評価等一切不利益が無いこと、個人情報保護、ID番号化による匿名性の保証について説明し、質問紙への回答をもって同意とみなした。

V. 結果

1. 看護学科1年生(18年度生)の調査結果

2018年度の基礎看護学実習Ⅰは7月中旬の1週間、基礎看護学実習Ⅱは2月中旬の2週間に行われた。基礎看護実習Ⅰ前調査は、6月下旬に実施し、70名の学生に自記式質問紙を配布して、69名より回答を得た(回収率98.6%)。基礎看護学Ⅰ実習後調査は、7月下旬に実施し、92名の学生に自記式質問紙を配布して、92名より回答を得た(回収率100.0%)。基礎看護学Ⅱ実習後調査は、3月初旬に実施し、89名の学生に自記式質問紙を配布して、88名より回答を得た(回収率98.9%)。

本調査では、全3回の調査に継続して回答し、SOC13項目における欠損値を除いた58名のデータを分析対象とした。対象者の平均年齢は19.3(SD±3.6)歳であった。

1) 1年生の臨地実習前後のSOC得点の変化(表1)

SOC得点は、基礎看護学実習前の平均が53.7(SD±7.6)点、基礎看護学実習Ⅰ後が57.4(SD±8.0)点と向上し有意差があった($p<.001$)。基礎看護学実習Ⅱ後の平均は56.6(SD±8.6)点と低下した。基礎看護学実習前との比較では有意差があった($p=.003$)。

2017年度(17年度生)の調査では、基礎看護学実習前と基礎看護学実習Ⅱ後の平均点に有意差があった($p=.01$)。

2) 1年間のSOC変化群と関連要因の分析結果(表2)

SOC変化群の分布は、低－低－低の低値維持群が18名(31.0%)、低－低－高群4名(6.9%)、低－高－高群3名(5.2%)、低－高－低群6名(10.3%)、高－低－高群3名(5.2%)、高－低－低群3名(5.2%)、高－低－低群5名(8.6%)、高－高－高の高値維持群が16名(27.6%)であった。クロス表は低－低－高群および低－低－高群を上昇群、低－高－低群および高－低－高群を変化群、高－低－低群および高－低－低群を下降群として整理した。

SOC変化群8パターンの χ^2 検定では、日々のストレス($p=.001$)、看護師教育へのストレス($p=.049$)、主観的健康観($p=.002$)、自分に対する好感度($p=.038$)に有意な差があった。

3) 基礎看護学実習Ⅱ後のSOC変化群の関連要因に関する比較(表3)

基礎看護学実習Ⅱ後の「相談できる人」の有無と相談相手、「日々のストレス」の有無と内容、「ストレスコーピング」の有無と方法、「実習に対する不安」の有無と内容を低群と高群で比較した。

相談できる人の有無に差は無かった。相談する相手は、どちらも友人、親、兄弟の順に多く、チューター教員が2名、実習指導教員が1名であった。日々のストレスの内容では、低群に学校生活関連やアルバイト関連が多くあがった。ストレスコーピングの方法としては、どちらも好きなことをすることや趣味を充実させることがあがった。実習への不安は殆どの学生はあると答え、高群の2名が無いと答えた。内容としては、どちらも看護過程の展開が多く全体の61.4%であった。次いで患者とのコミュニケーション、看護師とのコミュニケーションがあがった。

表1 1年生の臨地実習前後のSOC得点の変化

	基礎看護学実習前		基礎看護学実習Ⅰ後		p 値	基礎看護学実習Ⅱ後		p 値
	平均	SD	平均	SD		平均	SD	
18年度生 (N=58)								
SOC得点	53.7	7.6	57.4	8.0	p<.001**	56.6	8.6	.411 .003* 注1)
17年度生 (N=71)								
SOC得点	54.5	10.1	55.8	9.3	0.1	57.0	8.7	.118 .01* 注2)

対応のある t 検定 ** p<.001 *p<.05

注1)2) : 基礎看護学実習前との対応

表2 1年生のSOC変化群と関連要因のクロス表

(N=58)

		低値維持群 n=18	上昇群 n=7	下降群 n=8	変動群 n=9	高値維持群 n=16	P 値
看護の志望動機 注3)							
	あり	15 (26.3)	6 (10.5)	8 (14.1)	9 (15.8)	16 (28.1)	.312
	なし	2 (3.5)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
相談できる人							
	いる	16 (28.1)	5 (8.8)	8 (14.1)	16 (28.1)	15 (26.3)	.982
	いない	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (1.8)	
日々のストレス							
	ある	15 (26.3)	3 (5.3)	7 (12.3)	12 (19.0)	3 (5.3)	.001*
	なし	2 (3.5)	2 (3.5)	1 (1.8)	5 (8.8)	13 (22.8)	
看護師教育へのストレス							
	ある	16 (14.3)	3 (4.8)	7 (11.1)	12 (19.0)	3 (5.3)	.049*
	なし	2 (11.1)	2 (3.2)	1 (1.6)	5 (7.9)	13 (22.8)	
ストレスコーピング							
	している	5 (8.8)	4 (7.0)	5 (8.8)	14 (24.5)	1 (1.8)	.06
	していない	1 (1.8)	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (1.8)	6 (10.5)	
	どちらでもない	11 (19.3)	1 (1.8)	2 (3.5)	2 (3.5)	9 (15.8)	
主観的健康観							
	悪い	1 (1.7)	4 (6.9)	5 (8.6)	14 (24.2)	0 (0.0)	.002*
	良い	7 (12.1)	0 (0.0)	1 (1.7)	1 (1.7)	13 (22.4)	
	どちらでもない	10 (17.3)	1 (1.7)	2 (3.4)	2 (3.4)	3 (5.2)	
コミュニケーションに対する不安							
	ある	17 (29.3)	5 (8.6)	7 (12.1)	7 (12.1)	9 (15.5)	.16
	ない	1 (1.7)	2 (3.4)	1 (1.7)	1 (1.7)	7 (12.1)	
自分に対する好感度							
	嫌い	13 (22.4)	3 (5.2)	4 (6.9)	2 (3.4)	3 (5.2)	.038*
	好き	0 (0.0)	4 (6.9)	1 (1.7)	2 (3.4)	7 (12.1)	
	どちらでもない	5 (8.6)	7 (12.1)	3 (5.2)	5 (8.6)	6 (10.3)	

Pearson の χ^2 検定 ** p<.01 * p<.05 だが、P 値は参考値とする

注3) 無回答を除いた n 数

() 内は%

表3 1年生の基礎看護学実習Ⅱ後のSOC低群・高群と関連要因の比較 (N=58)

質問項目	n (%)	SOC 低群 n = 30	SOC 高群 n = 28
相談できる人の有無			(無回答 1)
1. いる		29 (50.0)	26 (44.8)
2. いない		1 (1.7)	1 (1.7)
相談する相手 (複数回答)			
1. チューター教員		2 (3.4)	2 (3.4)
2. 実習指導教員		1 (1.7)	1 (1.7)
3. 友人		22 (37.9)	23 (39.7)
4. 親		20 (34.5)	20 (34.5)
5. 兄弟		7 (12.1)	10 (17.2)
6. その他		1 (1.7)	0 (0.0)
日々のストレスの有無			
1. ある		23 (39.7)	10 (17.2)
2. ない		7 (12.1)	17 (29.3)
ストレスの内容 (複数回答)			n = 20
1. 学校生活関連		8 (40.0)	2 (10.0)
2. アルバイト関連		4 (20.0)	0 (0.0)
3. 人間関係		1 (5.0)	2 (10.0)
4. 経済関係		1 (5.0)	1 (5.0)
5. 家族関係		1 (5.0)	0 (0.0)
ストレスコーピングの有無			(無回答 1)
1. している		9 (15.5)	14 (24.1)
2. していない		5 (8.6)	2 (3.4)
3. どちらともいえない		16 (27.6)	11 (19.0)
ストレスコーピングの方法 (複数回答)			n = 30
1. 好きなことをする		8 (26.7)	12 (40.0)
2. 趣味を充実させる		5 (16.7)	2 (6.6)
3. その他		1 (3.3)	2 (6.6)
			相談する
実習への不安の有無			(無回答 1)
1. ある		30 (51.7)	24 (41.4)
2. ない		0 (0.0)	2 (3.4)
実習への不安の内容 (複数回答)			n = 57
1. 看護過程の展開		18 (31.6)	17 (29.8)
2. 患者とのコミュニケーション		9 (15.8)	7 (12.3)
3. 看護師とのコミュニケーション		2 (3.5)	1 (1.8)
4. その他		2 (3.5)	1 (1.8)
		失敗への恐れ 記録	知識不足

2. 看護学科2年生(18年度生)の調査結果

2018年度の成人看護学実習Ⅰは8月～9月の期間中、3週間の日程で行われた。実習前は基礎看護学実習Ⅱ後のデータを用いた。成人看護学実習Ⅰ後調査は、10月上旬に実施し、87名の学生に自記式質問紙を配布して、85名より回答を得た(回収率97.7%)。全4回の調査に回答し、SOC13項目における欠損値を除いた63名のデータを分析対象とした。平均年齢は20.0(SD±2.7)歳であった。

1) 2年生の臨地実習前後のSOC得点の変化(表4)

SOC得点は、実習前の平均が54.5(SD±9.2)点、実習後が57.0(SD±8.0)点と向上し、有意差があった($p<.01$)。

2017年度(16年度生)の調査では、実習後に向上したが有意差は無かった。

2) 2年間のSOC変化群と関連要因の分析結果(表5)

SOC変化群は16パターンを示した。低-低-

低-低の低値維持群が16名(25.4%)、高-高-高-高の高値維持群が17名(27.0%)であった。低-低-低-高群1名(1.6%)、低-低-高-高群1名(1.6%)、低-高-高-高群3名(4.8%)を上昇群5名(7.9%)、低-低-高-低群4名(6.3%)、低-高-低-低群4名(6.3%)低-高-低-高群3名(4.8%)、高-低-低-高群1名(1.6%)、高-低-高-低群が1名(1.6%)、高-低-高-高群3名(4.8%)、高-高-低-高群1名(1.6%)を変

動群、高-低-低-低群3名(4.8%)、高-高-低-低群2名(3.2%)、高-高-高-低群3名(4.8%)を下降群とし、クロス表に整理した。SOC変化群16パターンの χ^2 検定では有意差はなかった。

3) 成人看護学実習 I 後の低群・高群の関連要因に関する比較(表6)

成人看護学実習 I 後の「相談できる人」の有無と相談相手、「日々のストレス」の有無と内容、「ストレスコーピング」の有無と方法、「実習に

表4 2年生の臨地実習前後のSOC得点の変化

	成人看護学実習 I 前		成人看護学実習 I 後		p 値
	平均	SD	平均	SD	
18年度生 (N=63) SOC 得点	54.5	9.2	57.0	8.0	.009*
17年度生 (N=79) SOC 得点	54.8	8.1	55.8	7.8	.16

対応のある t 検定 * $p < .05$

表5 2年生の2年間のSOC変化群と関連要因のクロス表

(N=63)

	低値維持群 n = 16	上昇群 n = 5	下降群 n = 8	変動群 n = 17	高値維持群 n = 17	p 値
看護の志望動機 ^{注3)}						
あり	12 (20.4)	5 (8.5)	6 (9.9)	16 (26.7)	17 (28.3)	.785
なし	2 (3.3)	0 (0.0)	2 (3.3)	1 (1.7)	0 (0.0)	
相談できる人						
いる	14 (22.6)	5 (8.1)	8 (12.9)	16 (25.8)	17 (27.4)	.885
いない	1 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	
日々のストレス						
ある	9 (14.3)	3 (4.8)	7 (11.1)	12 (19.0)	5 (7.9)	.229
なし	7 (11.1)	2 (3.2)	1 (1.6)	5 (7.9)	12 (19.0)	
ストレスコーピング						
している	7 (11.3)	4 (6.5)	5 (8.1)	14 (22.6)	8 (12.9)	.530
していない	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.6)	1 (1.6)	1 (1.6)	
どちらでもない	7 (11.3)	1 (1.6)	2 (3.2)	2 (3.2)	8 (12.9)	
コミュニケーションに対する不安						
ある	11 (17.5)	3 (4.8)	6 (9.5)	12 (19.0)	8 (12.7)	.403
ない	5 (7.9)	2 (3.2)	2 (3.2)	5 (7.9)	9 (14.3)	
自分に対する好感度						
嫌い	7 (11.1)	2 (3.2)	2 (3.2)	2 (3.2)	0 (0.0)	.376
好き	2 (3.2)	2 (3.2)	3 (4.8)	8 (12.7)	9 (14.3)	
どちらでもない	7 (11.1)	1 (1.6)	3 (4.8)	7 (11.1)	8 (12.7)	

Pearson の χ^2 検定 * $p < .05$ p 値は参考値とする

注³⁾ 無回答を除いた n 数

() 内は%

対する不安」の有無と内容を低群と高群で比較した。

相談できる人の有無では低群の2名がいないと答えた。相談する相手は、どちらも友人、親、兄弟の順に多く、次いでチューター教員が、低群2名、高群6名であった。日々のストレスの内容では、低群に学校生活関連や人間関係が多くあがった。ストレスコーピングの方法としては、どちらも好きなことをしたり、趣味を充実させることをあげていた。実習への不安は殆どの学生はあると答え、両群の2名が無いと答えた。内容としては、

どちらも看護過程の展開が多く、低群が18名、高群が13名、次いで患者とのコミュニケーションで、低群10名、高群4名であった。

3. 看護学科3年生（16年度生）の調査結果

2018年度の領域実習は5月～11月、統合実習は12月に行われた。臨地実習前の調査は2017年度3月上旬に実施したデータを用いた。臨地実習後の調査は3月上旬に71名の学生に自記式質問紙を配布して、70名より回答を得た（回収率98.6%）。全4回の調査に回答し、SOC13項目における欠

表6 2年生の成人看護学実習Ⅰ後のSOC低群・高群と関連要因の比較 (N=63)

質問項目	n(%)	SOC 低群 n=33	SOC 高群 n=30
相談できる人の有無		(無回答 1)	
1. いる		30 (47.6)	30 (47.6)
2. いない		2 (3.2)	0 (0.0)
相談する相手（複数回答）			
1. チューター教員		3 (2.4)	6 (4.9)
2. 実習指導教員		2 (1.6)	2 (1.6)
3. 友人		26 (21.3)	29 (23.8)
4. 親		16 (13.1)	22 (18.0)
5. 兄弟		7 (5.7)	8 (6.6)
6. その他		0 (0.0)	1 (0.8)
日々のストレスの有無			
1. ある		23 (36.5)	13 (20.6)
2. ない		10 (15.9)	17 (27.0)
ストレスの内容（複数回答）			
1. 学校生活関連		9 (29.0)	4 (12.9)
2. アルバイト関連		2 (6.5)	2 (6.5)
3. 人間関係		7 (22.6)	4 (12.9)
4. 経済関係		1 (3.2)	0 (0.0)
5. 家族関係		1 (3.2)	0 (0.0)
6. その他		0 (0.0)	1 (3.2)
ストレスコーピングの有無			
1. している		19 (30.2)	19 (30.2)
2. していない		3 (4.8)	1 (1.6)
3. どちらともいえない		10 (15.9)	10 (15.9)
ストレスコーピングの方法（複数回答）			
1.好きなことをする		9 (30.0)	10 (33.3)
2. 趣味を充実させる		6 (20.0)	3 (10.0)
3. その他		1 (5.0)	1 (5.0) 相談する
実習への不安の有無			
1. ある		31 (49.2)	28 (44.4)
2. ない		2 (3.2)	2 (3.2)
実習への不安の内容（複数回答）			
1. 看護過程の展開		18 (42.6)	13 (31.0)
2. 患者とのコミュニケーション		10 (23.8)	4 (9.5)
3. 看護師とのコミュニケーション		1 (2.4)	1 (2.4)
4. その他		1 (2.4) 実習グループ	3 (7.1) 記録・提出物

損値を除いた52名のデータを分析対象とした。
平均年齢は20.0 (SD ± 1.9) 歳であった。

1) 3年生の臨地実習前後のSOC得点の変化(表7)

SOC得点は、領域実習前の平均が55.8 (SD ± 8.1) 点、実習後が56.8 (SD ± 10.2) 点で、有意な差は無かったが ($p < .26$)、実習後に向上した。

2) 2年間のSOC変化群と関連要因の分析結果(表8)

SOC変化群は13パターンを示した。低-低-低-低の低値維持群が9名(17.3%)、高-高-高

-高の高値維持群が11名(21.2%)であった。低-低-低-高群2名(3.8%)、低-低-高-高群7名(13.5%)、を上昇群、低-低-高-低群5名(9.6%)、低-高-低-低群4名(7.6%)、低-高-低-高群1名(1.9%)、低-高-高-低群1名(1.9%)、高-低-高-低群が1名(1.9%)、高-高-低-高群2名(3.8%)を変動群14名(27.0%)、高-低-低-低群1名(1.9%)、高-高-低-低群5名(9.6%)、高-高-高-低群3名(5.8%)を下降群とし、クロス表に整理した。SOC変化群13パターンの χ^2 検定では、コミュニケーション

表7 3年生の臨地実習前後のSOC得点の変化

(N=63)

	領域実習前		臨地実習終了後		p 値
	平均	SD	平均	SD	
SOC 得点	55.8	8.1	56.8	10.2	.26

対応のある t 検定 * $p < .05$

表8 3年生の2年間のSOC変化群と関連要因のクロス表

(N=52)

	低値維持群 n=9	上昇群 n=9	下降群 n=9	変動群 n=14	高値維持群 n=11	p 値
看護の志望動機 ^{注3)}						
あり	6 (11.5)	9 (17.3)	8 (15.4)	14 (26.2)	11 (21.2)	.401
なし	3 (5.8)	0 (0.0)	1 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	
相談できる人						
いる	8 (15.4)	9 (17.3)	8 (15.4)	13 (25.0)	11 (21.2)	.848
いない	1 (1.9)	0 (0.0)	1 (1.9)	1 (1.9)	0 (0.0)	
日々のストレス						
ある	8 (15.4)	2 (3.8)	6 (11.5)	8 (15.4)	3 (5.8)	.096
なし	1 (1.9)	7 (13.5)	3 (5.8)	6 (11.6)	8 (15.4)	
ストレスコーピング						
している	4 (7.7)	4 (7.7)	4 (7.7)	11 (21.2)	10 (19.2)	.068
していない	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	
どちらでもない	5 (9.6)	5 (9.6)	3 (5.8)	3 (5.8)	11 (21.2)	
					1 (1.9)	
コミュニケーションに対する不安						
ある	9 (17.3)	6 (11.5)	8 (15.4)	13 (25.0)	5 (9.6)	.022*
ない	0 (0.0)	3 (5.8)	1 (1.9)	1 (1.9)	6 (11.5)	
自分に対する好感度						
嫌い	5 (9.6)	2 (3.8)	3 (5.8)	1 (1.9)	1 (1.9)	.092
好き	0 (0.0)	4 (7.7)	1 (1.9)	5 (9.6)	5 (9.6)	
どちらでもない	4 (7.7)	3 (5.8)	5 (9.6)	8 (15.4)	5 (9.6)	

Pearson の χ^2 検定 * $p < .05$ p 値は参考値とする

注³⁾ 無回答を除いた n 数

() 内は%

に対する不安に有意差があった ($p=.022$)。

3) 臨地実習終了後の低群・高群の関連要因に関する比較 (表9)

3年生の実習終了後の「相談できる人」の有無と相談相手、「日々のストレス」の有無と内容、「ストレスコーピング」の有無と方法、「実習に対する不安」の有無と内容を低群と高群で比較した。

相談できる人の有無では低群の2名がいないと答えた。相談する相手は、どちらも友人、親、兄弟の順に多く、次いでチューター教員が、低群2

名、高群11名であった。実習指導教員は低群2名、高群5名であった。日々のストレスの内容では、殆ど差は無かった。ストレスコーピングの方法としては、どちらも好きなことをすることや趣味を充実させることがあがった。実習への不安は殆どの学生はあると答え、低群6名、高群3名が無いと答えた。内容としては、どちらも看護過程の展開が、低群7名、高群3名、次いで患者とのコミュニケーションが、低群5名、高群6名であった。

表9 3年生の臨地実習終了後のSOC低群・高群と関連要因の比較 (N=52)

質問項目	n (%)	SOC 低群 n=28	SOC 高群 n=24
相談できる人の有無		(無回答 1)	
1. いる		25 (48.1)	24 (46.2)
2. いない		2 (3.8)	0 (0.0)
相談する相手 (複数回答)			n = 110
1. チューター教員		2 (1.8)	11 (10.0)
2. 実習指導教員		2 (1.8)	5 (4.5)
3. 友人		22 (20.0)	23 (20.9)
4. 親		11 (10.0)	18 (16.4)
5. 兄弟		4 (3.6)	9 (8.2)
6. その他		2 (1.8) 夫	1 (0.9) 夫
日々のストレスの有無			
1. ある		21 (40.4)	6 (11.5)
2. ない		7 (13.5)	18 (34.6)
ストレスの内容 (複数回答)			n = 11
1. 勉強		1 (9.0)	0 (0.0)
2. 人間関係		3 (27.3)	1 (9.0)
3. 将来のこと		3 (27.3)	1 (9.0)
4. 経済関係		0 (0.0)	1 (9.0)
5. 家族関係		1 (9.0)	0 (0.0)
6. その他			
ストレスコーピングの有無			
1. している		16 (30.8)	17 (32.7)
2. していない		2 (3.8)	0 (0.0)
3. どちらともいえない		10 (19.2)	7 (13.5)
ストレスコーピングの方法 (複数回答)			n = 24
1.好きなことをする		10 (41.7)	9 (37.5)
2. 趣味を充実させる		2 (8.3)	2 (8.3)
3. その他		0 (0.0)	1 (4.2) 相談する
実習への不安の有無			(無回答 3)
1. ある		22 (49.2)	18 (44.4)
2. ない		6 (3.2)	3 (3.2)
実習への不安の内容 (複数回答)			n = 24
1. 看護過程の展開		7 (29.2)	3 (12.5)
2. 患者とのコミュニケーション		5 (20.8)	6 (25.0)
3. 看護師とのコミュニケーション		1 (4.2)	1 (4.2)
4. 看護技術		0 (0.0)	1 (4.2)

VI. 考察

3年課程の看護学生の臨地実習前後のSOCと関連要因の変化を、学習支援方法の改善策を講じながら縦断的横断的に把握した結果から、学習支援方法の改善策の効果と課題について考察する。

1. 1年生のSOCと関連要因の変化から見た改善策の効果と課題

2018年度入学生の基礎看護学実習Ⅰ後のSOC得点は有意に向上した。2017年度入学生では向上する傾向のみであったため、教員研修や学生への啓蒙活動の効果を示している。一方、基礎看護学実習Ⅱ後にSOC得点は低下した。2017年度入学生では向上しており、SOC変化群と関連要因を確認し、今後の改善点を明確にする必要がある。

1年間のSOC変化群では、「日々のストレス」「看護師教育へのストレス」「主観的健康観」「自分に対する好感度」に有意差があった。2017年度入学生に多かった「相談できる人」がいない「ストレスコーピング」していない学生は減少傾向であった。教員研修や学生への啓蒙活動により、資源を有効活用して課題を乗り越えることの重要性が伝わった可能性があり、改善策の効果と言える。「コミュニケーションに対する不安」に有意差は無いが、低値維持群は17名と比較的多いままであった。継続してフォローアップする体制が必要である。

基礎看護学実習Ⅱ後のSOC変化群の比較では、実習への不安の内容は、低群・高群とも看護過程の展開が多く、60%の学生が不安と感じていた。先行研究[10]でも同様に報告されており、SOCが高い学生でも初めて取り組む看護過程に対処できず、SOCが低下した可能性がある。現行では各領域で用いる教材が統一されていないことも含め今後の重要課題である。

2. 2年生のSOCと関連要因の変化から見た改善策の効果と課題

2017年度入学生の成人看護学実習Ⅰ後のSOC

得点は有意に向上した。2016年度入学生では向上する傾向のみであったため、改善策の効果を示している。

2年間のSOC変化群では、有意差は無かったが、2017年度の低群に多かった「相談できる人」がいない「ストレスコーピング」していない「コミュニケーションに対する不安」がある学生は減少傾向であった。

低値維持群には「自分への好感度」で嫌いと答えた学生が多い傾向が続いていた。成人看護学実習Ⅰ後のSOC変化群の比較では、実習への不安の内容は、低群に看護過程の展開が多かった。臨地実習での良質な経験から、自己効力感や自分への好感度を高められるような学習支援方法の改善が必要である。

一方では、高群の学生の相談する相手にチューター教員が増えており、教員研修や学生への啓蒙活動により、資源を有効活用して課題を乗り越えることの重要性が伝わった可能性もあり、改善策が一定の効果あげていたことは確認できた。

2017年度の調査では、USR活動や学園祭等の課外活動に参加した2年生のSOCが向上する可能性が示唆されており[14]、臨地実習以外にもコミュニケーションや人との関りを通し、自己効力感を高められる機会を活かしたアプローチ方法を検討する必要性が示唆された。

3. 3年生のSOCと関連要因の変化から見た改善策の効果と課題

臨地実習前後のSOC得点に有意差は無かったが実習後に向上した。

2年間のSOC変化群では、「コミュニケーションに対する不安」に有意差があった。

高値維持群以外は、卒業を目前にした段階で「コミュニケーションへの不安」があると答えた学生の割合が多かった。2年生では減少傾向であったため、段階的なアプローチ方法を検討する必要性を確認することができた。

2017年度の低群に多かった「相談できる人」がいない「ストレスコーピング」していない学生

は減少傾向であった。

臨地実習終了後のSOC変化群の比較では、高群の学生の相談する相手にチューター教員が増え、資源を有効活用して課題を乗り越えることの重要性が伝わった可能性があり、改善策の効果と言える。

日々のストレスや実習への不安については、将来のことや臨床での看護過程の展開に関する内容が含まれており、3年生のチューター教員の関りを強化する必要がある。しかし、3年生の臨地実習は5月～12月に2～3週間の領域実習と3週間の統合実習が実習グループ毎に組み込まれており、講義・演習・実習指導をしながらの関りには限界がある。チューター教員間および実習担当教員の連携を強化し、複数の教員が同じ方向性で支援できる体制が望ましい。加えて、各学年担当教員は年度ごとに学科内で検討・決定されてきたが、2年生の担当教員が継続して担当することはなかった。教員が複数名持ち上がりで3年生を担当することにより、学生が相談しやすい環境に改善できる可能性がある。

Ⅶ. 看護学生のSOCを高めるための段階的学習支援方法の検討

看護学生の学習支援方法の改善策の効果や課題を踏まえ、SOCを高めるための段階的学習支援方法の体系化に向けて、現行のチューター制学生支援を基盤にした3年間の学生支援計画を考案した。

1. 各学年のチューター制学生支援による年間支援計画

チューター制学生支援の目的として、建学の精神、看護学科教育目標に基づき、3年間で看護の専門家として、社会人としての基礎作りの成長を支援することがあげられている。

現行の組織体制、会議やクラスミーティングの運用方法は継続することとしたが、学年担当教員の複数名が2年～3年間継続して担当することが望ましく、結果を看護学科教員間で共有し推奨す

ることとした。

看護過程の展開に関する課題は、今後の2022年度カリキュラム改正へのプロセスにおいて検討されることとなった。

また、本研究で使用した推奨図書[11]を、学生・教員の双方の教材として活用することとし、著者の承諾を得て、学生がアクセスしやすいようにデジタル化を図る予定である。

以下に3年間の学生支援計画を示し、段階的にSOCを高めるために加えた視点について説明する。

1) 1年生の学生支援計画(表10-①)

支援目標を以下の通りとし年間計画を作成した。

- ①学生が新しい環境に適応し、大学生としての基本的姿勢が身につくよう支援する。
- ②学生間の良好な人間関係が形成でき、お互いを尊重し協力し合えるよう支援する。
- ③学生が大学生として主体的に学ぶ姿勢を身につけ、学習習慣を確立できるよう支援する。

2019年10月より「低学年の学生、成績不良学生への学習支援」を導入し、面談による学生の学習環境等の把握や指導を行っている。初回の面談では、志望動機や将来の希望、入学後の学習状況、経済面、友人関係、その他気がかりなことを把握し、フォローアップすることが定着しているためそのまま継続することとした。1年生は、社会人基礎力を身につけるための「大学生生活論」が配当されているので、授業スケジュールを年間計画に加え、チューターの支援活動と併せて可視化した。SOCを高める視点として、面談時には、明確な職業志望動機を持ち入学しているか、対人関係や環境の変化に対する心身の適応はどうかを把握し、必要時対処の方向性をアドバイスする。臨地実習時にはチューター教員や担当教員間の情報共有の基、学生がコミュニケーションや人との関りを通し、自己効力感が高められる「良質な経験」を積むことができるよう支援することを加えた。

2) 2年生の学生支援計画(表10-②)

支援目標を以下の通りとし年間計画を作成し

た。

- ①様々な場、発達段階における対象者と看護学に対し関心を高めることができるよう支援する
- ②学内外において良好な関係性を形成し社会人として成長できるよう支援する
- ③就職支援システムやインターンシップを通じて進路が明確になるよう支援する
- ④看護師国家試験合格へ向け、自己学習習慣を確立し、基礎学力を確実につけられるよう支援する

2年生では、学習課題として看護の専門性を高めるための講義・演習・実習に取り組む。また、学園祭等の課外活動のリーダー的役割を期待され、キャリア開発や国家試験対策等の課題にも取り組む。チューター教員は各関係委員会・部門との協力の基に支援を行う。クラスミーティングでは、SOCに関する情報提供を行うこととし、SOCを高める視点として、面談時には、コミュニケーションに不安は無いのか、相談できる人はいるか等を把握し、対処の必要性や方法をともに考えることを加えた。教材を用いて、自分を助けてくれる存在に気づくワークシートを紹介することや臨地実習や課外活動の際には、チューター教員や担当教員間の情報共有の基、学生がコミュニケーションや人との関りを通し、自己効力感が高められる「良質な経験」を積むことができるよう支援することを加えた。

3) 3年生の学生支援計画(表10-③)

支援目標を以下の通りとし、年間計画を作成した。

- ①卒業時の到達目標(教育目標・学修成果)が達成できるよう支援する
- ②主体的に取り組み、自己の進路(就職・進学)を確定できるよう支援する
- ③日々の学習習慣を定着させ『全員が看護師国家試験に合格できる』よう支援する

3年生は最終学年となり、多くの臨地実習科目が配置され、進学・就職活動や国家試験受験対策等の課題に取り組む。これまで育んできたSOCをより高め、学生が様々なストレスに耐えて

自己実現を目指し、心身の健康状態を保持しながら、看護専門職になる上での課題と向きあうことを支援する。学生は16～17の領域実習グループ編成で年間スケジュールを組んでいることから、各チューター教員は2～3グループを受け持ち、臨地実習担当教員や各関係委員会・部門と協働し、個々の学生を支援する。SOCを高める視点として、クラスミーティングや面談時には、みんなの力を出し合って課題を乗り越えることや自分の意思で今できることやすべきことに向かう必要性に気づくよう働きかけること。進学・就職試験や看護師国家試験に向かう終盤では、あきらめない心で、誰かの力をかりて乗り越えていくよう働きかけることを加えた。

また、従来から卒業後もフォローアップするために、ホームカミングデイの日程を決め、最後のクラスミーティングで伝えている。卒業はなりたい自分への第一歩であること、これからも誰かの力をかりて課題を乗り越えてほしいことを付け加え、また会う日を楽しみに送り出すこととした。

2. 研究の限界と今後の課題

本研究は、A短期大学看護学科の2年間の縦断的横断的調査に基づき、看護学生のSOCを高める段階的学習支援方法を検討しており、一般化には限界がある。今後、入学から卒業までの3年間の段階的学習支援方法の効果を検証し、初年次教育の見直しやカリキュラム改正の影響によるSOCの変化を前提に継続的な効果や有用性を確認することが課題である。

VII. 結論

3年課程の看護学生のSOCと関連要因の変化を学習支援方法の改善策を講じながら縦断的横断的に把握し、効果や課題を確認した上で、SOCを高める段階的学習支援方法の体系化に向けた、チューター制による3年間の学生支援計画を考案した。改善策を講じた後の1・2年生のSOCは有意に向上した。今後も効果を検証し継続的な有用性を確認することが課題である。

表 10-1 ① 1年生の学生支援計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
支援 目標	1. 学生が新しい環境に適応し、大学生としての基本的姿勢が身につくよう支援する。 2. 学生間の良好な人間関係が形成でき、お互いを尊重し協力し合えるよう支援する。 3. 学生が大学生として主体的に学ぶ姿勢を身につけ、学習習慣を確立できよう支援する。											
行事 予定	<ul style="list-style-type: none"> 入学式 オリエンテーション ICTオリエンテーション 健康診断 保護者会 		<ul style="list-style-type: none"> 同時試験 国試ガイダンス 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎実習Ⅰ 定期試験 夏季休暇の課題 	<ul style="list-style-type: none"> 再試験 		<ul style="list-style-type: none"> 学園祭 保護者会 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツ大会 	<ul style="list-style-type: none"> 冬期休暇の課題 	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験 低学年模範試験 学内就職説明会 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎実習Ⅱ 再試験 クラスイベント 	
初年度 教育 としての 大学 生活論 (授業)	<ul style="list-style-type: none"> 学科長講話「建学の精神・看護学科教育方針」 学生支援体制（委員会・学生総合支援センター・五橋キャンパス事務） チャーター制度 チャーター利用 	<ul style="list-style-type: none"> ガイディング1 大学生の学び方「ノート作り・リーディング」 ガイディング2 図書館の活用方法「図書・電子書籍の利用ほか」 	<ul style="list-style-type: none"> 大学生生活にかかわる基礎知識「ネット社会の危険について考える」 		<ul style="list-style-type: none"> 夏季休暇中の課題 	<ul style="list-style-type: none"> 健康に関する知識「こころの問題」 	<ul style="list-style-type: none"> ガイディング3 抄読会「看護・看護師・患者・ケア」 大学生生活にかかわる基礎知識「交通ルール・マナー」「消費者トラブル」 健康に関する知識「ドラッグの危険性と健康」 			<ul style="list-style-type: none"> 大学生生活のまとめ「看護学生としての1年の振り返り」「看護学生としての課題と目標」 		
チャーター 支援活動	<ul style="list-style-type: none"> オリエンテーション 保健室業務への協力 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談（全員） 一斉メールアドレスの確認（ICT） 随時・定期試験受験に関するオリエンテーション（教務委員会） 	<ul style="list-style-type: none"> 保健室業務協力 国家試験ガイダンスの開催 	<ul style="list-style-type: none"> 夏季休業中の課題（国試対策） 	<ul style="list-style-type: none"> 保健室業務協力 	<ul style="list-style-type: none"> 学生／保護者面談（該当者） 健康管理注意喚起 奨学金募集の対応 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談（全員） 学園祭企画・運営支援 成績低下者への学修・生活指導 保護者会・保護者面談 	<ul style="list-style-type: none"> 成績不振等の学生の保護者面談（対面・電話） スポーツ大会企画・運営支援 	<ul style="list-style-type: none"> 冬期休業中の課題 	<ul style="list-style-type: none"> 低学年模範試験開催 	<ul style="list-style-type: none"> 留年生の休学・復学の面談 学内就職説明会の開催（キャリア開発） 2年生チャーターへの学生情報の申し送り 	<ul style="list-style-type: none"> 成績低下者への学修・生活指導 新入生オリエンテーション準備 2年生チャーターへの学生情報の申し送り
会議	<ul style="list-style-type: none"> 第1回会議 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回会議 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 第3回会議 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 第4回会議 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 必要時・メール審議・随時情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> 第5回会議 	<ul style="list-style-type: none"> 新体制による会議
クラス ミーティング			<ul style="list-style-type: none"> 授業の連絡、夏季休暇の課題、学園祭、夏季休暇の注意事項ほか 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回クラスミーティング 授業の連絡、夏季休暇の課題、学園祭、夏季休暇の注意事項ほか 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回クラスミーティング 受講方法、保健室連絡、健康管理、学園祭、面談ほか 				<ul style="list-style-type: none"> 第3回クラスミーティング 保健室連絡、冬期休暇中の注意事項、クラスメイト、冬期休暇の課題ほか 			
SOCの 視点	<ul style="list-style-type: none"> 推奨図書紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 明確な職業志望動機を持ち入学しているか 知人関係や環境の変化に対する心身の適応はどうか 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎Ⅰの教員間の情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションや人との関わりが高められる「良質な経験」 						<ul style="list-style-type: none"> 基礎Ⅱの教員間の情報共有 看護過程展開への不安や対応方法の経験 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションや人との関わりを通して、自己効力感が高められる「良質な経験」 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションや人との関わりを通して、自己効力感が高められる「良質な経験」

表 10－② 2年生の学生支援計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
支援 目標	1. 様々な場、様々な段階における看護の対象者と看護の形成し社会人として成長できるように支援する。 2. 学内外において良好な関係性を形成し社会人として成長できるように支援する。 3. 就職支援システムやインターンシップを通じて進路を明確化できるように支援する。 4. 看護師国家試験合格へ向け、自己学習習慣を確立し、基礎学力を確実に身につけられるよう支援する。											
行事 予定	・オリエンテーション ・健康診断	・随時試験	・前定期試験	・インターンシップに参加 成人看護学実習Ⅰ	・学園祭 ・第1回模擬試験 ・保護者会	・スポーツ大会	・随時試験 ・第2回模擬試験	・キャリアナビガイダンス ・学内就職説明会	後期・定期試験	・インターンシップに参加		
チューター 担当の活動	【チューター教員の役割】 ①学生が学習・就職などについて相談する窓口である。 ②学生生活への進路を、他教員と連携しながら支援する。 ③看護専門職を目指す者としての目標と成長に向けて支援する。 ④実習や国家試験等に対して、学生が主体的な学習成果を得られるように支援する。 ⑤就職・進学に対する学生の意向を知り、学生総合支援センターと連携しながら支援をする。 ⑥学生および保護者に対して適宜情報提供を行い、相談に応じる。											
会議	第1回 面談 全員	第2回 必要時面談	第3回 必要時面談	第4回 9～10月面談 全員				必要時面談	第6回	第7回 2～3月面談 全員	第8回 3年生チューターへ学生情報の 申し送り	
クラス ミーティング	【チューター教員の役割】 ①学校生活や国家試験対策等に関する、重要な情報伝達の際となるよう支援する。 ②グループで協力しあっているから実習や課題を確実に合格ができるよう支援する。 ③主体的に取り組むグループ作りができるように支援する。											
SOCの視点	第1回 ガイダンス 第2回 係活動の決定 と共有 ・目標決定	第2回 課題の確認 ・課外活動紹介			第3回 学生の係目標中間 評価 ・学園祭について ・諸連絡	第4回 諸連絡 模試結果 ・課外活動紹介	第5回 諸連絡 模試結果 ・課題の確認		第6回 ・コミュニケーションや人との関わりを通して、自己効力感が高められる「良質な経験」：課外活動	第7回 ・なりたい自分や看護師像が描ける ・今やるべきこととが分かったり できる	第8回 ・最終学年に向かう準備 臨地実習 国試対策 キャリアデザイン	
	・推薦図書紹介 ・コミュニケーションに不安はないか ・相談できる人はいるか 対処法をともに考える	・自分を助けてくれる存在に気づくワークシート紹介（教材 P200）	・成人Ⅰの教員間の情報共有 ・コミュニケーションや人との関わりを通して、自己効力感が高められる「良質な経験」：課外実習 ・資源を活用し課題を乗り越えられる									

表 10-③ 3年生の学生支援計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
支援 目標	1. 卒業時の到達目標（教育目標・学修成果）が達成できるよう支援する 2. 主体的に取り組む、自己の進路（就職・進学）を確定できるよう支援する。 3. 日々の学習習慣を定着させ、『全員が看護師国家試験に合格できる』よう支援する											
行事 予定	・オリエンテーション ・健康診断	・領域実習開始 ・国試対策 模擬試験・補講		・保護者会 ・随時試験			・学園祭	総合演習・実習 ・国試手続き	総合演習・実習 ・国試手続き		・受験票交付式 ・看護師国家試験	・看護研究発表 ・卒業式 ・国試合格発表
チューター 担当の活動	【チューター教員の役割】 ①学生が学習・就職などについて相談する窓口である。 ②学生生活への適応を、他教員と連携しながら支援する。 ③看護専門職を目指す者としての自尊と成長に向けて支援する。 ④実習や国家試験等に対して、学生が主体的な学習成果を得られるように支援する。 ⑤就職・進学に対する学生の意向を知り、学生総合支援センターと連携しながら支援をする。 ⑥学生および保護者に対して適宜情報提供を行い、相談に応じる。											
会議	第1回 面談 全員	第2回 必要随時面談	第3回	第4回	第5回 面談 全員	第6回	第7回	第8回	第9回 面談 全員	第10回	第11回会議	
クラス ミーティング	【チューター教員の役割】 ①学校生活や国家試験対策等に関する、重要な情報伝達となるよう支援する。 ②グループで協力しあいながら実習や課題を乗り切り、国家試験を確実に合格ができるよう支援する。 ③主体的に取り組む取り組みクラスおよびグループ作りがてきように支援する。											
	第1回 ・委員の決定 ・目標づくり ・連絡網作成				第2回 詰連絡 課題の確認	第3回 ・学生の各委員会 標中間評価 ・学園祭について ・詰連絡		第4回 ・詰連絡 課題の確認		第5回 ・学生の各委員会 目標中間評価 ・卒業バーティ	第6回 ・詰連絡 ホームカミング パーティ	
SOCの視点	・最終学年スタート ・臨地実習 ・国試対策 ・進学就職	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう	・みんなの力を出し合って課題を乗り越えよう ・自分の意思で今できることややるべきことに向かう

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいたみなさまに心より感謝いたします。

尚、本研究は2019年度仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（課題番号3109）の助成を受けて実施した。

文献

- [1] Antonovsky Aaron: Health Stress and Coping: New perspectives on Mental and Physical Well-Being. Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1979.
- [2] 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 坂野純子 (編): ストレス対処能力SOC. 有信堂高文社, 東京, 2008, pp.172-174.
- [3] 近藤克則編: 検証「健康格差社会」介護予防に向けた社会疫学的大規模調査. 医学書院, 東京, 2007.
- [4] 高橋由美: 仮設住宅に暮らす高齢者が抱えている問題. 看護展望. 2015; 4: 27-33.
- [5] 江上千代美: 看護学生の首尾一貫感覚と精神健康度との関係. 心身健康科学. 2008; 4: 44-48.
- [6] 本江朝美, 川口毅, 谷山牧, 他: 女子看護学生の Sense of Coherence とその関連要因の検討. 昭和大学保健医療学雑誌. 2005; 65: 365-373.
- [7] 高島尚美, 大江真琴, 五木田和枝, 他: 成人看護学臨地実習における看護学生のストレス縦断的变化ー心理的ストレス指標と生理的ストレス指標からー. 日本看護研究学会雑誌. 2010; 33: 115-121.
- [8] 本江朝美, 高橋ゆかり, 古市清美: 看護学生の Sense of Coherence と自己および他者に対する意との関連. 上武大学看護学部紀要. 2011; 6: 1-8.
- [9] 大島和子, 福島和代: 看護大学生の職業志望動機とストレス. 心身健康科学. 2017; 13: 62-71.
- [10] 樺野香苗, 金子さゆり: 基礎看護学実習における看護学生のSOC変化とそれに影響するストレス要因. 名古屋市立大学看護学部紀要. 2016; 15: 15-21.
- [11] 蝦名玲子: 生き抜く力の育て方ー逆境を成長につなげるためにー. 大修館書店, 東京, 2016.
- [12] 高橋由美, 及川珠美, 阿部春美, 他: 3年課程の看護学生のストレス対処能力(SOC)と関連要因に基づく学習支援方法の検討ー1年生と2年生の臨地実習前後の実態調査による量的分析よりー. 研究紀要Seiyō. 2020; 11 (2): 7-19.
- [13] 高橋由美, 須藤千寿美, 二口尚美, 他: 看護学生と教員のUSR活動がもたらす看護学生のSOCへの影響ー被災高齢者への交流支援を通してー. 日本ルーラルナース学会第14回学術集会抄録集. 2019; 52.